THE CAMBRIDGE ENCYCLOPEDIA OF LANGUAGE

言語学百科事典

デイヴィッド・クリスタル=著
風間喜代三/長谷川欣佑=監訳

ら

大修館書店

言語学百科事典

デイヴィッド・クリスタル＝著
風間喜代三/長谷川欣佑＝監訳

江苏工业学院图书馆
藏书章

大修館書店

《監訳者》
風間喜代三（法政大学教授）　長谷川欣佑（東京大学教授）

《訳　者》
佐久間淳一（東海大学非常勤講師）　福井　玲（明海大学講師）
滝浦　真人（共立女子短期大学講師）　町田　健（成城大学助教授）
長谷川　宏（東京工業大学講師）　籾山　洋介（名古屋大学講師）
林　龍次郎（聖心女子大学講師）
（50 音順）

© K. Kazama K. Hasegawa 1992

言語学百科事典

1992 年 4 月 10 日　初版発行　定価 15,450 円
（本体 15,000 円・税 450 円）

監訳者　風間喜代三
長谷川欣佑
発行者　鈴木荘夫

発行所　株式会社　大修館書店
101 東京都千代田区神田錦町 3-24
電話03-3295-6231（販売部）　03-3294-2356（編集部）

印刷・製本／図書印刷　装丁／鳥居　満
ISBN 4-469-01202-2　Printed in Japan

序 文

私が本書を書いた目的は，人間の言語の存在を祝福し，その研究にたずさわっている人たちにいくらかの貢献をすることである。目標としたのは，世界の諸言語が極めて多様であり，何百万人もが話している言語であれ，数百人しか話していない言語であれ，どの言語においても，すぐれた文学作品の最も洗練された言い回しから，日常的な会話の最も平凡な発話まで，表現には大きな幅があり，複雑であり，そして美しいものであるということを示すことである。同時に，言語研究の魅力と価値をいくらかでも伝えたいと思っている。言語の研究により，言語の構造，発達，使用に関して，数え切れないほどの一般的な発見がなされてきたのであり，個人と社会の問題に関して，非常に多くの重要な応用が可能となってきたのである。

本書はしたがって *2* つのレベルにわたって記述がなされている。一方では，ある語の歴史について議論をしたり，小さな子供がやっと言葉を話そうとしているのを目を細めて聞いたりしているときに見られるような，言語の歴史や言語行動に対する興味を反映している。また他方では，観察された事実を理解したり，その中に型や原理を見いだそうとする試みから生じるより深いレベルの興味，つまり言語研究を職業として専門的に行ったり，言語教育や言語治療などの，言語に関連した職業についたりすることにもつながっていく興味をも反映している。

私はまたある実用的な目標ももっている。つまり，本書を読むことで，人間の言語がいかに複雑であるかが認識され，言語が問題となったりまた解決を与えもする，人間に関わる一連の問題に対して注意が促され，人々は無視されてはならない言語上の権利をもっているのだということが強調されることを期待している。私は *1987* 年の初めに，ブラジルのレシフェにあるペルナンブコ連邦大学のフランシスコ・ゴメス・デ・マトス氏が発起人となった，「個人の言語的権利の宣言」を求める誓願を *1* 部受け取った。この誓願は，全世界にわたって言語的偏見や差別が広く存在しており，人々が言語学習や言語使用に対して特別の援助を受けようと思う場合に，種々の問題に直面することを指摘している。あらゆる人々には，母語を使用し，第 *2* 言語を学習し，言語的な障害があるときには特別の治療を受けたりするなどの権利がある。しかし，世界の多くの地域では，このような権利

がないか，不十分にしか与えられていないのである。この種の問題に対して衆目が集まることによってのみ，そのような権利が認められるようになるのであり，私が希望しているのは，個人および社会において言語がいかに重要であるかに人々が理解を示し，それに応じて行動するような状況を作り上げていくのに，この百科事典が寄与するということである。

私は「百科事典」という名称を用いたが，自信をもって選んだわけではない。「百科事典の卵」に当たる名称があったとしたら，そちらのほうがよかっただろう。言語に関わる問題は本当に広範で，限られたページ数ではその出だしを述べることができるだけである。特に，私の背景は言語学なので，哲学，心理学，人工知能のような他の思想や研究の伝統に対して，不十分な配慮しかしていないことは分かっている。また，言語学的な観点から記述を進めてはいるものの，本書は言語学の入門書ではない。言語学で与えられている数多くの言語分析の方法についての議論は行っていないし，理論的な相違点については，この問題をさらに深めたいと思っている人には，巻末の参考文献が資料を提供してくれるだろうと期待して，詳しい専門的な記述はほとんどしていない。

このことは，本書の至るところにちりばめられているたくさんの言い訳の *1* つに過ぎない。言語使用に関する事実の収集は極めて困難で，たとえ得られたとしても，すぐに古くなってしまう。言語を研究するために学者たちが作り出す技術や理論がすぐに変わるのと同様に，言語も急速に変化する。一方で，本書ほど楽観的な見通しをもって書かれた本もそうはないだろう。これは，ケンブリッジ大学出版局が選んで下さった編集顧問の方々のご支援と熱意によるところ多大である。自分の計画と資料が，これほどの著名な学者たちによって吟味されることを知っていることは，この上もない安心感を与えるものであり，本書執筆の途中では，顧問の方々のご助言から計り知れないほどの恩恵を受けた。顧問の方々に対しては，ここに謝意を表したい。彼らの援助を受けたことはすばらしい名誉であり，その結果である本書がかえって迷惑にならないことを希望する。言うまでもなく，内容に関する責任はすべて私にある。

最後に，資料の調査でお世話になったレディング大学の言語学科の皆さん，本書の準備段階で貴重な助言をいただいた出版局の編集部の皆さん，そしてとりわけ，この計画が実を結ぶまで私を支えてくれた妻のヒラリーにも謝意を表したい。

ディヴィッド・クリスタル

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

訳 序

国際化の波にのって，最近とくに言葉への関心が高まり，それに伴って言語学の辞典・事典が内外で続々と刊行されている。それらは大小さまざまだが，どれもそれなりの特色を備えて，利用者の要求に応えようと苦心している。ただあまり大部のものは個人では利用しにくく，また記述が細かすぎてかえって初学者を迷わせる結果になる。

その意味で本書はやや分量は多いが，一冊で今日の言語研究のすべてを尽している上に，たくさんの写真や図表を使って読者を楽しませてくれるところに大きな特色がある。言語学の本というと，えてしてむずかしい理論で埋められていて敬遠されがちのものだが，本書はまるで趣きを異にしている。読者は著者のおかげで，コラムなどをみながら本文を読み進むと，いつの間にか言語の驚異を教えられ，その研究の魅力にひきつけられてしまうだろう。

原著が刊行されて暫くしてこの翻訳が計画され，私と長谷川さんとが相談して，新進気鋭の諸兄にそれぞれ専門の分野を担当していただくことにした。そこで実際に仕事にかかってみると，本文以外の部分，巻末の術語対照表など予想以上に訳出に時間を要し，また原著の美しさを損なわないための編集部の苦労も並々ならぬものがあった。なお原著の記述のなかの疑問点は著者に質し，明らかに誤りと思われるところは訂正した。

終りに，数章の翻訳に加えて訳文の統一や校正全般にわたって，すべてを担当して下さった町田健君と，編集部の米山順一氏に改めて感謝したい。

1992 年春

風間喜代三

目　　次

序　文/*iii*
訳　序/*v*

第1部　言語に関する一般的な考え方――――*3*

1　規範的伝統/*5*
2　言語の平等性/*11*
3　言語の魔力/*14*
4　言語の機能/*17*
5　言語と思考/*23*

第2部　言語とアイデンティティー――――*27*

6　身体的アイデンティティー/*29*
7　精神的アイデンティティー/*35*
8　地理的アイデンティティー/*38*
9　民族および国民のアイデンティティー/*51*
10　社会的アイデンティティー/*57*
11　コンテクストにかかわるアイデンティティー/*74*
12　文体的アイデンティティーと文学/*103*

第3部　言語の構造――――*129*

13　言語のレベル/*131*
14　類型論と普遍的特性/*134*
15　言語の統計的構造/*137*
16　文法/*140*
17　意味論/*156*
18　辞書/*168*
19　名前/*173*
20　談話とテキスト/*179*
21　語用論/*185*

第4部　言語の媒体：話すことと聞くこと――*189*

22　話し言葉の解剖学と生理学/*191*
23　言葉の音響学/*199*
24　器械による音声の分析/*206*
25　音声の受容/*210*
26　言葉による機械とのやりとり/*219*
27　言語音/*222*
28　音声の言語学的使用/*232*
29　超分節素/*243*
30　音象徴/*251*

第5部　言語の媒体：書くことと読むこと――*255*

31　書き言葉と話し言葉/*257*
32　書記表現/*263*
33　文字論/*278*
34　読み書きのしくみ/*294*

第 6 部　言語の媒体：手まねと視覚 ―― 309

35　手話/311
36　手話の構造/314
37　手話の類型/317

第 7 部　幼児の言語習得 ―― 321

38　幼児言語の研究/323
39　生後 1 年目/335
40　音韻論的発達/341
41　文法的発達/344
42　意味的発達/348
43　語用論的発達/352
44　学校での言語発達/356

第 8 部　言語・脳・言語障害 ―― 369

45　言語と脳/371
46　言語障害/379

第 9 部　世界の言語 ―― 405

47　言語はいくつあるのか/407
48　何人の話者がいるのか/411
49　言語の起源/414
50　語族/420
51　インド・ヨーロッパ(印欧)語族/425
52　その他の語族/436
53　孤立言語/462
54　言語変化/465
55　ピジンとクレオル/475

第 10 部　世界の中の言語 ―― 485

56　言語の壁/487
57　翻訳と通訳/490
58　人工言語/504
59　世界語/512
60　多言語使用/517
61　言語計画/524
62　外国語学習と教育/530
63　特殊な目的のための言語/545

第 11 部　言語とコミュニケーション ―― 571

64　言語と他のコミュニケーションシステム/573
65　言語学/585

付録 ―― 599

世界の言語一覧/601
術語対照表/623
音声記号一覧/635
図書案内/637

参考文献 ―― 645
索引 ―― 655

人名索引/657
事項索引/660
言語名索引/677

謝辞 ―― 684

装丁　鳥居　満

言語学百科事典

第1部　言語に関する一般的な考え方

言語というのはなぜこのように魅力的な研究対象なのだろうか。それはことによると言語には，広範囲に及ぶ人間の思考や努力を表現する上で，独自の役割があるからかもしれない。我々は自分の回りを見渡して，そこに各種様々な数千もの言語や方言があり，それらが多様な世界観や文学や生活様式を表現していることに畏敬の念を抱くのである。また我々が先人の考えたことを振り返って見てみようとすると，言語が教えてくれる以上のことは何も分からないということがわかる。将来のことを考える場合にも，言語を通してしか計画を立てることができないということがわかる。さらに宇宙へ目を向ける場合，自分たちが誰であるかを説明するために，宇宙船とともにコミュニケーションの信号を送っている。もしそこに知りたがっている人が誰かいればの話だが。

以上のことと並んで，言語は，自分や自分の社会を理解したり，人間間の相互交渉から生じる諸問題や緊張状態を解決する手段としても，重要なものであると考えられる。社会のどの部門も言語の影響を受けずにはいられないし，すべての部門が，コミュニケーションの手段であるばかりでなく，障害にもなっている言語上の諸要因を研究することから恩恵を受けることがありうるのである。しかしながら，言語上の問題は簡単に解決できることはめったになく，まさにこういった初歩的な観察からこの本を作ろうということになったのである。

本書の主要な狙いは，言語構造と言語使用のあらゆる面に関して情報を提供し，言語および言語を使用する人々に作用する複雑な力を理解しやすくするということである。このように客観的な方法で言語を体系的に分析し，議論するということは，人が相互に尊重し合い，許容し合う世界の実現のためにも必要不可欠な一歩であるという信念に本書は基づいている。「あの人達は我々とは違う言葉を話す。したがって，あの人達は我々とは違うのである。したがって，あの人達は我々のことが好きではないのである。」こういった類の論理は，この本に含まれる情報が努めて否定しようとするものである。

しかしながら，このような世界ははるか先のことである。現在我々が目にする世界は，多くの言語上の不寛容と緊張状態の徴候を示している。そういった徴候は，インドやベルギーの言語暴動やウェールズやスペイン北部の醜く汚された道路標識に最も顕著に現れている。そういった徴候は，それほどあからさまではなくとも，多くの学校で伝統的な純粋主義者の言語習慣がわけもなく維持されているということや，世界のラジオや新聞で自分たち以外の人達の言葉の用法に関していつも滔々と不平が述べられているということにも見られる。

したがって，この本ではまず最初に，「文明」社会と「非文明」社会の両方において，言語に関する一般的な考え方の本質に影響を与えてきた最も重要な考え方を見ることにする。まず，正しさという概念と言語に対する規範的な態度が歴史的にどう発達してきたかということから話を始める。言語アカデミーを支持する運動に見られるような，言語を「純粋」に保ちたいという願いと言語変化に対する一般的な懸念を見る。我々は，ある言

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

語の方が他の言語よりも優っているという意見が広く行き渡っているにもかかわらず，すべての言語が平等であるという主張を述べる。これに続いて，言語の魔力と神秘的な力に関して一般に信じられていることを論じ，さらに，言語が日常生活において果たす広範囲に及ぶ働きを全般的に調べあげる。そして，第 *1* 部の結びとして言語と思考の関係という興味深くはあるが，複雑な問題を考えることにする。

▼言語は文化的に多様である。このことは，3 人の中世の医者の討論（ライモンディ〈Marcantonio Raimondi〉作の版画），ロティ島の長老達の儀式としての議論，人間とコンピュータのデータベースの対決に見られる通りである。

1　規範的伝統

言語に関するどんな本を読み始めようとするときでも，読者は著者よりも明らかに優位な立場に立っている。ほとんどすべての研究分野において，読者はすでにその分野のことを「知っている」のである。「知っている」と言っても，読者はすでにある言語を話したり，読んだりしているという意味でだが。さらに，現代社会においては，言語を駆使する技術が高く評価されているので，言語の本質と言語の機能に関してはっきりとした考えを持っている読者も多いであろう。このことは，例えば天文学やローマ神話や物理学に関する百科事典を開く場合の読者の頭の普通の状態とは異なる。

したがって，我々は，人々が教育や社会的な発達の通常の過程を経た結果として，すでに持っている言語に関しての見解や信念の主要なものを見ることから研究を始めなければならない。こういった考え方は多くの読者にとって馴染みのある説であろうし，さらにまたこのことは，以下で述べる言語に関する詳細で，体系的で，客観的な研究に向けての出発点としての役割もするであろう。

感情的問題

言語を体系的かつ客観的に研究することは容易なことではない。言語をめぐる一般的な議論は，悪口や非難に堕してしまうのが常である。言語は皆のものである。それゆえ，大部分の人が自分には言語に関して何らかの意見を持つ権利があると感じている。そして，意見が食い違うと，感情が高揚することもありうる。語法のささいな問題に関しても，言語計画や言語教育の重要な政策に関する場合と同様に，いともたやすく議論が燃え上がることもありうる(*61* 節)。

さらに，言語を話すということは極めて公共性の高い行為であるから，他と異なった用法が注目され，批判されやすいのである。社会や社会的行為のいかなる部分もその例外ではない。言語的要因が人格，知性，教育程度，社会的地位，職業適性や他の分野（アイデンティティーや社会の中で生き延びていくこと等）に関する我々の判断に影響を及ぼすのである。その結果，人の言語使用に対して冷酷な攻撃を加える場合，その人を傷つけることになりやすいし，またその逆の場合には自分が傷つけられることにもなりやすい。

アメリカの言語学者ブルームフィールド (Leonard Bloomfield, *1887-1949*) が，言語に対する人々の *3* つのレベルの反応という観点からこういった状況を論じた。「第 *1* の反応」は実際の使用である。「第 *2* の反応」は我々が言語に関して持っている意見であり，それは何らかの専門用語を用いて述べられる場合が多い。「第 *3* の反応」は，だれかがこういった意見にあえて異議をさしはさむ場合に燃え上がる感情である。ブルームフィールドは，断固としてアメリカインディアンの言語チペワ語（Chippewa）には数百の単語しかないと考えている医者のもとを訪れた時の話を語っている。ブルームフィールドがその問題を論じようとすると，医者はそっぽを向き，聞こうともしなかった。こういった類の分別のない反応が残念ながらあまりにも多いのである。しかしながら，だれもがそういった反応をしがちなのである——言語学者も言語学者でない人も同様に。

規範主義

規範主義とは，その語の最も一般的な意味では，ある種の言語は本来的に他の言語よりも高い価値を有し，これを守ることが言語共同体全体に課されるべきであるとする考え方である。この考え方は特に文法と語彙に関して，また発音に関しても頻繁に提出される。良いとされる言語の種類とは，この説明から

〈オーウェル(George Orwell)〉(*1903-50*)

『政治と英語』(*Politics and the English Language*, *1947*) の中で，オーウェルは，「直観が働かない時にあてにできる」*6* つの規則を挙げている。これらの規則は，文学や科学の言語を念頭において書かれたのではなく，「思考を隠蔽したり妨げたりするための道具ではなく，表現するための道具としての」言語を育成するという日常的な必要性から書かれたものである。こうすることによって，言語の頽廃（オーウェルは、このことは当時の「政治的混乱状態」と密接な関係があると考えていたのだが）を食い止めることができるのではないかとオーウェルは思っていた。

1　出版物によく見られる隠喩や直喩や他の比喩表現をけっして使ってはならない。
2　短い単語で事が足りる時には，けっして長い単語を使ってはならない。
3　ある単語が省略可能である場合には，必ず省略せよ。
4　能動態が使える時にはけっして受動態を使ってはならない。
5　外国語の語句や科学用語や隠語は，それに相当する日常的な英語を思いつく場合には，けっして使ってはならない。
6　何かまったく非標準的なことを言うくらいならこれらの規則をどれでも破りなさい。

(さらに p.*546* を参照)

すると，通常「標準的な」書き言葉であり，特に文学作品や文学作品の文体を最も厳密に踏まえているあらたまった話し言葉に見られるようなものである。こういった種類の言語を支持する人は「正しく」話したり，書いたりすると言われるのに対して，こういった種類の言語から逸脱すると「間違っている」と言われるのである。

ヨーロッパの主要な言語はすべて規範的に研究がなされてきた。特に *18* 世紀に文法や辞書を書くことを目的とした研究においてはそうであった。こういった初期の文法家の狙いは次の *3* つからなっていた。

(a) 彼らは自分たちの言語の諸原則を成文化し，うわべの混沌とした用法の背後に体系があるのだということを示したいと思っていた。

(b) 彼らは用法をめぐる議論に決着をつけるための手段が欲しいと思っていた。

(c) 彼らは言語を「より良くする」ために，よくありがちな間違いだと思っていることを指摘したいと思っていた。

この研究方法の権威主義的な性質は，文法の「規則」に依存しているという顕著な特徴がある。用法の中には正確に学び，従うべきものとして「規定」されているものもあれば，避けるべきものとして「禁止」されているものもある。この初期の頃には妥協はまったくなかった。つまり，正しい用法と間違った用法のいずれかしかなく，文法家の仕事は単にいくつかの候補を記録に留めるのではなく，それらに対して判断を下さなければならなかった。

こういった考え方は今もなお残っており，言語の規範は維持しなければならないという広い関心の底流にある。一方，これに代わる視点もあり，それは「規範」よりもむしろ言語用法の諸事実の方に関心を向けるという視点である。この研究方法は，文法家の仕事は「記述する」ことであって，「規定する」ことではない——多様な言語事実を記録することであって，多様な言語に評価を下したり，言語変化を食い止めるという無理な仕事は企てない——という言葉でまとめられる。*18* 世紀の後半にはすでにプリーストリー（Joseph Priestley）のようなこういった考え方を提唱する人が出てきた。彼は『英文法の基礎』（*Rudiments of English Grammar, 1761*）の中で「話すという習慣的行為こそがいかなる言語の場合でも元々のそして唯一の公正な規範なのである」と主張している。言語をめぐる諸問題は，論理学や法律では解決できないという主張がなされている。そしてこういった考え方は文法分析を目指す近代言語研究の教義となった。

現代においては「記述主義者」と「規範主義者」が激しく対立する場合が多く，両陣営とも相手方に関して現実離れしたイメージを描いている。記述主義の文法家はあらゆる用法を等しく妥当なものだと見なすため，規範にはかまわない人達だとされてきたし，規範主義の文法家は昔ながらの伝統を盲目的に信奉する人達だとされてきた。この対立は政治

●伝統的な文法規則はどこに由来するのか

	規範的規則の例	記述的観点からのコメント
ラテン語とギリシア語 ラテン語とギリシア語の不変の形式やこの *2* つの言語がヨーロッパの教育において有していた高い権威，古典文学の異論の余地のない素晴らしさのために他の言語の文法家が，この *2* つの言語を優れた言語の模範とするようになった。	It is me ではなくて It is I と言ったり書いたりすべきである。というのも，ラテン語では，be 動詞の後に対格ではなくて主格が続くからである。	ラテン語の規則は普遍的なものではない。例えば，アラビア語では，be 動詞の後に対格が続く。英語では，me が教養のある人が使う略式の標準形であり，I は大変あらたまった感じがする。フランス語では，moi だけが可能である（c'est moi など）。
書き言葉 書くことの方が話すことよりも注意を要し，評価が高く，恒久的であり，特に文学の場合にはそうである。したがって，書くように話せと言われる場合が多いのである。	__did you speak to？というような文では，話す場合も書く場合も下線部では who ではなく whom を使うべきである。	書き言葉とあらたまった文体の話し言葉の場合には，whom が普通であるが，略式の話し言葉の場合には，who の方がふさわしい。妥当な話し言葉と書き言葉を支配する規則は大きく異なる場合が多い。
論理学 文法は，論理学の原則に従っている限りにおいて評価すべきであると感じている人が多いのである。この観点からすると，数学が言語を理想的な形で使用しているということになる。	I haven't done nothing と言ってはならない。というのも，二重否定は肯定になるからである。	この場合には，二重否定が肯定になっているのではなく，より強調的な否定となっているのである——これは多くの言語（例えば，フランス語，ロシア語など）に見られる構造である。この例は，標準英語では容認されないが，それは，論理学の命ずるところによるのではなく，社会的要因のためである。

用語を真似て「急進的自由主義」対「エリート中心保守主義」と述べられる場合もある。

こうした通念を捨てれば，いずれの研究方法とも重要であり，しばしば思われている以上に共通点が多いということがわかる——容認度，曖昧さ，理解可能性というような問題に共に興味を持っているのである。記述主義的研究方法は，異なる規範に関する競合する主張を融和できる唯一の方法である以上，不可欠である。言語使用に関する諸事実を知っていれば，特異な個人的意見を避け，教育や文体に関して現実的な提言を行うのにより有利な立場にあることになる。規範主義的研究方法は言語に関する価値観に焦点を合わせるのであるが，こうした価値観はだれもが持っており，かつまた，究極的には社会構造とその中で自分の置かれた位置に関する自分の考えの一部を成すものである。議論が始まってから *200* 年が経ち，何らかの調和が即座にはかられると期待することはおそらく楽観的であろうが，今や，社会言語学者（p. *593*）が言語に対する態度，言語の用法，言語に対する信念に説明を加えるという状況の中で規範主義をより真剣に見直し始めている以上，楽観主義を支える根拠が幾つかあるのである。

アカデミー

いくつかの国で，言語を保護する最も良い方法は言語をアカデミーの管理のもとに置くことであると考えられた。イタリアではイタリア語を純粋にするという目的で早くも *1582* 年にアッカデミア・デルラ・クルスカ (Accademia della Crusca) が設立された。フランスでは *1635* 年に枢機卿リシュリュー (Richelieu) がアカデミー・フランセーズ (Académie Française) を設立し，その後の多くの団体の模範となった。アカデミーの規則は自らの主要な役割を次のように定義している。

> 我らの言語に明確な規則を与え，我らの言語を純粋で，雄弁で，芸術や科学を扱えるものにするためにできうる限り注意深く

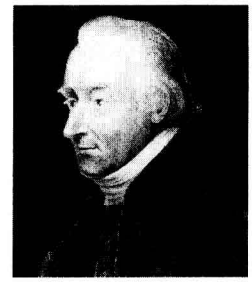
●マレーの文法書

18 世紀に最も大きな影響力を持った文法書の *1* つは，ラウス (Robert Lowth) の『簡略英文法入門』(*Short Introduction to English Grammar*, *1762*) である。マレー (Lindley Murray) の広く使われた『英文法』(*English Grammar*, *1794*) はラウスの文法書に刺激されて生まれたものである。どちらの文法書も刊行以後数十年の間に *20* 版以上を重ねた。

マレーの本は特にアメリカで，学校での学習，一般の人々の考え方にきわめて大きな影響力を及ぼした。次の彼の唱えた頭韻を踏んだ原則には，規範主義の合い言葉がいくつか含まれている：'Perspicuity requires the qualities of purity, propriety and precision.'「明晰であるためには純粋さ，適切さ，正確さという特質が必要である。」

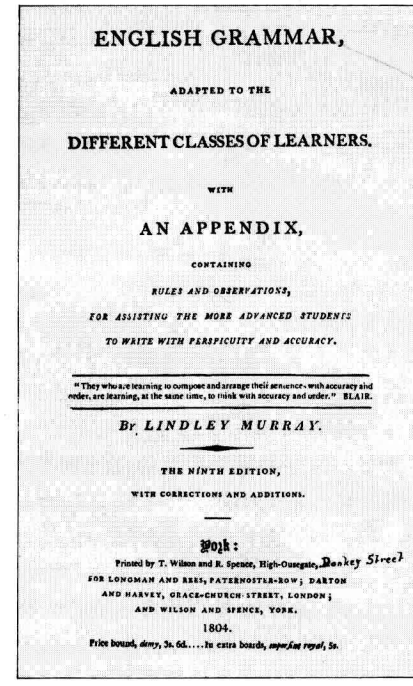
マレーの一般的な言語に関する原則のいくつかは，まったく非の打ち所がない。例えば「二重の意味や曖昧さは避けるようにせよ」や「理解できない語や句は避けるようにせよ」がその例である。だが，彼の分析の大部分，それに付録の詳細な原則群の「話し，書く際により明晰にするための規則と所見」には，恣意的な規則やラテン語に由来する不自然な分析というようなものが含まれており，これは，*2* 世紀に亘る論争に油を注ぐことになった。例えば規則 *16* では「英語では*2*つの否定辞は相殺して，肯定に相当する」という否定の原則が説明してある。

マレーの諸規則は広く教えられ，今日なお見られる言語純粋主義の大方の基盤を築いたと同時に猛烈な非難も受けた。



◀マレー (Lindley Murray, *1745–1826*)

*1826*年の『アメリカ教育ジャーナル』(*American Journal of Education*) である人はマレーの文法をたとえて「我々の単純な言語が外国の拷問台で処刑された」ようなものだと書いた。また，*1833* 年には，文法家は規則を「発明」するのではなくて「発見」すべきだという批判もなされた。現代言語学が出現するはるか以前に，記述主義と規範主義という両陣営の戦線はすでにはっきりとできあがっていたのである。



ENGLISH GRAMMAR,

ADAPTED TO THE

DIFFERENT CLASSES OF LEARNERS.

WITH

AN APPENDIX,

CONTAINING

RULES AND OBSERVATIONS,

FOR ASSISTING THE MORE ADVANCED STUDENTS

TO WRITE WITH PERSPICUITY AND ACCURACY.

"They who are learning to compose and arrange their sentences with accuracy and order, are learning, at the same time, to think with accuracy and order." BLAIR.

By LINDLEY MURRAY.

THE NINTH EDITION,

WITH CORRECTIONS AND ADDITIONS.

York:

Printed by T. Wilson and R. Spence, High-Ousegate, Donkey Street

FOR LONGMAN AND REES, PATERNOSTER-ROW; DARTON AND HARVEY, GRACE-CHURCH-STREET, LONDON; AND WILSON AND SPENCE, YORK.

1804.

Price bound, *demy*, 3s. 6d.....In extra boards, *super-fine royal*, 5s.

▲マレーの『英文法』(*English Grammar*)

かつ勤勉に取り組むこと

40人のアカデミー会員が聖職者や貴族や軍人といった地位に就いている人達から抜擢された。これは今日まで続いている偏った傾向である。アカデミーの最初の辞書が1694年に出た。

他のいくつかのアカデミーが18世紀から19世紀にかけて設立された。スペインアカデミーはフェリーペ5世（Felipe V）によって1713年に設立され，その後200年の間にそれに相当する団体が大部分の南米のスペイン語国で設立された。スウェーデンアカデミーは1786年に，ハンガリーアカデミーは1830年に設立された。シリアとイラクとエジプトには3つのアラビア語アカデミーがある。ヘブライ語アカデミーはもっと最近の1953年になって設立された。

英国では17世紀にアカデミー設立を求める提案が，ドライデン（John Dryden）やデフォー（Daniel Defoe）というような人々の支持を得てなされた。デフォーの考えでは，このアカデミーの会員の名声は，

> その人達が文体や言語に関して判断を下すことを認められた人となるのに十分なものであろう。そして，作家は誰一人としてアカデミー会員の許可を得ずに，無分別に新語を造るということをしてはならないであろう……。もうこれ以上派生的表現や構文を探し求める根拠はないはずであり，新語を造るということは貨幣を鋳造するのと同じくらい犯罪的な行為ということになろう。

1712年にスウィフト（Jonathan Swift）は「英語を正し，改善し，確定することを求める提案」を世に問い，その中でオックスフォードの伯爵である英国の大蔵卿に対して次のように訴えた。

> 我々の言語は極めて不完全なものである。我々の言語の日々の改善は，その日々の頽廃とけっして比例関係にあるわけではない。我々の言語に磨きをかけ，洗練されたものにしているのだといったふりをしている者達が，主として誤用や馬鹿げた用法を増やしているのである。多くの場合，我々の言語は文法のあらゆる面において違反を犯しているのである。

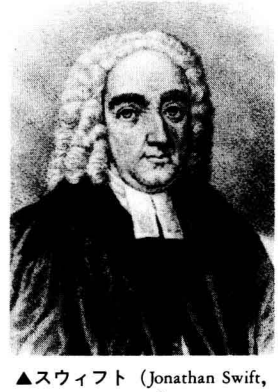
彼の属するアカデミーは「我々の言語を永久に固定しよう」としていたのである。というのも，

> 私の考えは，言語が永続的な変化を続けるくらいなら，完全無欠でない方がましであるということである。

この考えは当時大変支持されたが，何もなされなかった。そしてついには，この考え方に反対する考え方が強くなってきた。フランスとイタリアのアカデミーが，言語変化の進行を食い止めようとしても，うまくいかなかったということが明らかになった。ジョンソン博士（Dr Johnson）は自分の著した辞書の序文において，アカデミー，それも特に英国のアカデミーの無意味さに関して何の幻想も抱いておらず，そこに全体の考えとは反対の「英国の自由の精神」を見出していた。

> 我々は，人々が老齢になり，ある時期に達すると次々と死んでしまうということをどの時代においても目の当たりにしているので，寿命を1000年にも延ばすことを約束する霊薬等は一笑に付すのである。語句を変化から守った国の例を1つも示すこともできずに，自分の辞書は自分の国の言語をミイラにすることができるとか，自分にはこの世の自然力を変え，この世からた

▲デフォー（Daniel Defoe, 1660？-1731）



▲スウィフト（Jonathan Swift, 1667-1745）

●燻製ニシンをのせたトースト？
〈kipper *sur* toast〉

言語が適切に変化していくとともに，このような広告がほとんどのヨーロッパの都市でも見られるようになるであろう。こういった広告は，多くの国が食い止めようと努力しているにもかかわらず，英語がいかに公的生活に浸透しているかということを例証している。例えば，ドイツの郵政省は，Telefon（電話）の方が話し言葉でははるかに一般的であるにもかかわらず，長年に渡って公衆電話ボックスにFernsprecher（電話）を使うように強く求めてきたが，1981年にTelefonに変わった。

フランスでは，1977年に，フランス語に相当する語がある場合には，公式の場では英語からの借用語の使用を禁ずる法律すら可決されるに至ったが，この法律は，遵守よりも違反という形で敬意が払われた。認めようが認めまいが，アカデミーは，Franglais（フランス語と英語の混成語）や，Angleutsch（ドイツ語と英語の混成語）や，Swedlish（スウェーデン語と英語の混成語）や，Spanglish（スペイン語と英語の混成語）や，近年特に顕著になってきた他のすべての混成語に対抗できるものではないようである。（55, 61節）

ちどころに愚かさや虚飾や見せかけを取り除く力があるといった幻想を抱いている辞書編纂家がいたとすれば，同様に嘲笑されるのももっともなことである。

時折，相変わらず，英国アカデミーの考えが語られることがあるが，それが熱狂的に迎えられることはけっしてなかった。アメリカ合衆国でも同様の提案は退けられた。これとは対照的に *18* 世紀以来，英語圏のあらゆる地域で個人の著した文法書や辞書や文体の手引書が次第に多く出るようになった。

言語変化

言語変化という現象はおそらく他のどんな言語に関する問題よりも広く一般の人達の注目を集め，批判を受けるものであろう。変化とは堕落と腐敗を意味するに違いないと広く信じられているのである。年長の人達は若い人の何気ない言葉を観察して，規範は著しく崩れ去ったと結論を下すのである。そういう人達は様々なところに責任を負わせるのである——学校で近年言語教育の仕方が大きく変化したので，学校に責任を負わせる場合が最も多いが（*44* 節），国家の公的な放送機関に責任を負わせることもあり，そういった放送機関で伝統的な規範から逸脱した言葉遣いをすると，直ちに保守的で言語に敏感な聴取者の攻撃の的となる。こういった関心は，「アメリカ」英語の侵入と見なされるものに対して，ヨーロッパにおいて広範囲に及ぶ反発が起こった場合のように，国家的な規模に達する場合もある。

根拠のない悲観主義

変化を嫌う人が多いということは理解できることではあるが，言語変化に対する批判の大部分は誤解に基づくものである。現代の言語は問題が最悪の状態にあることを示していると一般に思われているが，どの世代もそう思い込んでいたのである。さらに，用法上の問題の多くは何世代も経てから繰り返し再燃するのである。現在注目の的となっている英語をめぐる論争のいくつかは，*18* 世紀や *19* 世紀の書物や雑誌にも見られるのである——それは，例えば，it's me や very unique といった表現をめぐる議論である。『クイーンズ・イングリッシュ』（*The Queens's English*, *1863*）において，カンタベリーの司祭であるアルフォード（Henry Alford）は当時の人達を悩ませていた用法上の問題を多数取り上げ，人々に言語は急速に堕落していると考える根拠を与えた。言語はそれ以来はっきりと分かるほどには変わっていないのであり，大部分の問題は今もなお残っている。*19* 世紀の半ばにはイギリス英語とアメリカ英語は *100* 年以内に相互に理解不能になってしまうであろう，との予測がされていたのである！

実際，言語変化が理解不能，曖昧さ，社会分裂といった問題にもなりかねない場合もある。もし変化があまりにも急速であれば，現在のパプアニューギニアのように，重大なコミュニケーション上の問題が生じることもありうる——これは言語計画の領域との関連で考えなければならない問題である（*55*，*61* 節）。だが，概して，どの時代でも言語の中で変化している部分は，広範囲の変化していない部分と比べて，ごくわずかなのである。実際，変化はめったに起こらないからこそ明確に識別でき，人目を引くのである。したがって，正確で効率的なコミュニケーションの手段を維持するために，たえずある程度注意を払い，関心を持つことが望ましいのであるが，実にしばしば見受けられる極端な悲観主義や保守主義を支える根拠はまったくないのである——そしてこういった態度は，英語では「シェイクスピア（Shakespeare）が話していた言葉を守ろう」といったスローガンに集約される場合が多いのである。

〈ウイリアム・カクストン〉

英国で最も早く言語変化の問題を世に訴えた人の *1* 人はカクストン（William Caxton, *1422?–91*）である。彼が執筆を行っていたのは，英語が最も大きな変化を受けた時代で，発音が大きく変化し，アングロ・サクソン語の屈折がまったくと言っていいほどなくなり，膨大な数の新しい語彙が主にフランス語から流入してきた時期であった。

そしてまた現在使われている言葉が，私が生まれた頃使われ，話されていた言葉とはだいぶ異なっているということは明らかだ……またその現在使われている英語にしても地方によって違ってくる。地域差がきわめて大きいために最近次のようなことがあった。

ジィーランドへ向かう商人を乗せた船がテムズ川を航行中，凪のために岬に停泊した。一行は船を降り，食料の調達に出かけた。その中の *1* 人，織物商人のシェフェルドという男が食物，特に「卵（eggys）」をもらいに *1* 軒の家を訪ねた。ところがそこの奥さんは「私はフランス語は話せません」と言う。男は怒った。こちらもフランス語は話せず，卵（egges）がほしいと言ったのに通じなかったからだ。そこで，別の男が「卵（eyren）」をいただけませんか」と言った時，やっと女は「わかりました」と答えた。やれやれ，現在卵を 'egges' と書いたものか，それとも 'eyren' と書くべきか。言葉は様々であり，変化を見せているため，誰をも満足させることは難しいことである（『エネイドス』〈*Eneydos*〉の序文，*1490*）。

カクストンと同じ嘆きは，長年に亘って聞かれている。もっとも，その後，英語の標準化が行われ，書き言葉が普及したため，それ以後，言語変化の問題はさして深刻ではなくなったが。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com